

1. 問題の設定

「実際に劉備は、諸葛亮に三顧の礼を尽くしたか？」は、答えが出るのか？

→ 歴史哲学の問題

2. 歴史とは、物語に過ぎない？⁽¹⁾

- 歴史家「三顧の礼はあった。正史に書いてある」

徐庶 先主に見え、先主 之を器とす。先主に謂ひて曰く、「諸葛孔明なる者は、臥龍なり。將軍 豈に之に見んことを願ふか」と。先主曰く、「君 与に俱に來れ」と。庶曰く、「此の人は、就きて見る可きも、屈し致す可からず。將軍、宜しく駕を枉げて之を顧るべし」と。是れにより先主 遂に亮に詣り、凡そ三たび往きて、乃ち見る（『三国志』卷三十五 諸葛亮伝）

- 批判者「歴史家が、史料を恣意的に選択しただけでは⁽²⁾」

亮 乃ち北行して備に見ゆ。備 亮と旧に非ず、又 其の年少なるを以て、諸生の意を以て之を待す。坐集 既に畢はり、衆賓 皆 去り、而るに亮 独り留まる。備 亦 其の言はんと欲する所を問はず。（諸葛亮伝 注引 魚豢『魏略』）

- 歴史家「史料の選択は、公共の批判に委ねられる。恣意的ではあり得ない。
歴史家は、矛盾した記述の背後にある事実を、より合理的に推定する」

例：渡邊義浩先生の論文より⁽³⁾

劉備 世事を司馬徳操に訪ぬ。徳操曰く、「儒生・俗士、豈に時務を識らんや。時務を識る者は俊傑に在り。此の間自づから伏龍・鳳雛有り」と。備 問ふに、「誰為らんや」と。曰く、「諸葛孔明・龐士元なり」と。（諸葛亮伝 注引『襄陽記』）

荊州の豪傑の先主に帰する者 日に益々多く、（劉）表 其の心を疑ひて、陰かに之を禦ぐ。（『三国志』卷三十二 先主伝）

劉備は荊州に客居してから六年間、自己の勢力扶植に努めている。
司馬徽に世事を尋ねたように（諸葛亮の属する）襄陽グループに働きかけた。

身長八尺、毎に自ら管仲・楽毅に比す（諸葛亮伝）。

（孟）公威 郷里を思ひ、北帰せんと欲す。亮 之に謂ひて曰く、「中国 士大夫を饒せり。遨遊するは何ぞ必ずしも故郷のみならんや」と。（諸葛亮伝 注引『魏略』）

三顧は事実としても、『魏略』は襄陽グループから劉備への働きかけを示す⁽⁴⁾。
諸葛亮は抱負を懐き、「名士」が少なく、活躍できる余地のある劉備に従った。

- 批判者「過去の事実とは、歴史家が主観的に選び、作ったものに過ぎない」

- 歴史家「事実とは、歴史家が史料を解釈する前から存在する。
より合理的な解釈があれば、誤りを訂正し、異なった事実を認める」

- 批判者「歴史家の解釈を離れた事実は、存在しないも同然である⁽⁵⁾」

備 亦 其の言はんと欲する所を問はず。備 性は眊を結ぶことを好み、時に適 人の髦牛の尾を以て備に与ふる者有り、備 因りて手に自ら之を結ぶ。（諸葛亮伝 注引『魏略』）

- 歴史家「先に無数の事実があり、歴史家による解釈と関係なく、存在し続ける。
歴史家は解釈を通じて、自分にとっての事実を確定させていく」

例：渡邊義浩先生の論文より

劉表の客将である劉備が勢力を伸張させる場合は、襄陽グループが最適であった。
「臥龍・鳳雛」を家臣にできれば「名士」を取りこめると考えていたことは、充分に予想し得る。
→ 諸葛亮を無視した『魏略』劉備は、渡邊先生にとっての「事実」でない

- 批判者「歴史とは解釈のことであり、よくできたお話・物語である」

3. 歴史学とは、言葉遊びに過ぎない？⁽⁶⁾

- 批判者「歴史家は、史料をこね回しているだけで、事実に近づけない」

- 歴史家「歴史家は、史料に基づいて、事実を認識しようとする。
史料によって、事実に近づきやすいものと、近づけないものがある」

先帝 臣の卑鄙なるを以てせず、猥りに自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに当世の事を以てす。(諸葛亮伝 出師の表)

臣松之 以為へらく、亮 表して云はく、「先帝 臣の卑鄙なるを以てせず、猥りに自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに当世の事を以てす」と。則ち亮 先に備に詣るに非ざること、明なり。聞見 辞を異にすると雖も、各々 彼此に生じ、然るに乖背することは至る。亦 良に怪しむ可きと為す。(諸葛亮伝 裴松之注)

●歴史家「史料の記述者の作為、歴史家の解釈が、事実をゆがめないデータがある」

例：渡邊義浩先生の論文より

表一 蜀漢政権の人的構成（別紙）

（氏名・本貫・初従年・父祖の官位・名声・諸葛亮との友好関係）

劉備の荊州客居期に初従した第二期家臣をまとめた表一Ⅱ期の「亮」の項によると、一六名中、一二名に諸葛亮との交友関係を認めることができる。諸葛亮の存在が、荊州における劉備集団の勢力拡張に大きな役割を果たしたことの証左となろう。

●批判者「歴史家を作った図表・グラフにも、元のデータ・歴史家の作為が入る」

●歴史家「物的な証拠は、作為が入らない」（碑文などの金石文、考古学的な遺物）

●批判者「事実は、じかに見聞できない。史料・証拠品の伝える言葉に基づき、整合的なお話を作りあげたら勝ちだ。まるで罪人が裁判で勝つように。言葉のなかでの整合性を取るだけ。歴史学は、言葉遊びに過ぎない」

●歴史家「史料・証拠品のなかでの整合性でなく、事実との整合性が生命線。歴史家の論文は、過去の事実との整合性をチェックされ続ける⁽⁷⁾」

●批判者「見聞できない『事実』との整合性をチェックするのは、そもそも不可能」

●歴史家「史料は、過去の事実を見るための開かれた窓ではない。視界をさまたげるための壁でもない。歪んだガラスのようだ⁽⁸⁾」

●批判者「すべて壁に書かれた模様に過ぎない。窓の絵が描いてあるだけ」

4. まとめ

① 歴史学は、過去の事実を知り得ない → 自明

② 歴史学は、言語に制約される → 自明

「実際に劉備は、諸葛亮に三顧の礼を尽くしたか？」は、答えが出るのか？

→ ①出ないからこそ、②言語を対象かつ道具として学問を続ける

《私見》

原理的な不可能性①を、克服できない②なら、歴史学は無意味か？

→ 歴史学の姿勢・言葉づかいは、価値を喪失しない。

歴史学は、あたかも事実を参照するような言葉づかいで、論文を記述する。

言葉づかいは思考を規定する。

思考が活性化するという利点があれば、歴史学の言葉づかいを捨てる必要はない。

○「過去に存在した曹操は、実際にどういう人物であったか」

×「テキスト群から、より整合的な曹操に関する言明を組み立てよう」

『三国演義』に接するときも「歴史学の言葉使い」で思考すると、読解が捗るのでは？

○「関羽は、実際にどういう気持ちで曹操を見逃したか」

以上

(1) 遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会 2010）169 頁～184 頁より。

(2) リシュアン・フェーベル『歴史のための闘い』（平凡社ライブラリー 1995）

(3) 渡邊義浩「劉備集団と荊州「名士」」（『三国政権の構造と「名士」』汲古書院 2004）

(4) 宮川尚志「孔明の出廬についての異説」（『学芸』五一一 1948）

(5) E.H.カー『歴史とは何か』（岩波新書 1962）を踏まえた遅塚氏の解釈

(6) 遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会 2010）184 頁～213 頁より。野家啓一『歴史を哲学する』（岩波書店 2007、岩波現代文庫 2016）に対する反論の部分。

(7) 遅塚氏は、カール・ポパーの「反証可能性」をあてはめる。

(8) C.ギンズブルグ『歴史・レトリック・立証』（みすず書房 2001）48 頁